

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 『玉塵抄』における「らう・つらう・うずらう」の 用法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 潔, Yamada, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000567">https://doi.org/10.57529/00000567</a>

# 『玉塵抄』における 「らう・つらう・うずらう」の用法

山田 潔

## 一 はじめに

『玉塵抄』<sup>①</sup>には「らう」143例「つらう」83例「うずらう」<sup>②</sup>32例が現れる。言うまでもなく、「つらう」「うずらう」は複合辞<sup>③</sup>であり、それぞれ1語の助動詞と考えるのが適当である。三者の共通点は二つある。上接語が全て動詞であることと、一般に係助詞に呼応することである。まず、上接語の動詞については、ラ変(存在詞)「ある(あり)」と他の一般動詞とに分けた場合、三者には次の偏りが見られる(以下「らう」「つらう」「う

ずらう」をラウ・ツラウ・ウズラウと表記する)。

	ラ変「ある」	ラウ	ツラウ	ウズラウ
一般動詞	23	120	66	27

すなわち、ラウは、ツラウ・ウズラウに比して著しくラ変「ある」に傾いている。

次に、係助詞との呼応については、次のような分布が見られる。φは係助詞無しを示す。

	φ	ゾ	コソ	カ	
	13	50	74	6	ラウ
	7	18	55	3	ツラウ
	8	0	0	24	ウズラウ

ラウはコソ・ゾとの呼応にさほどの用例の差異はないのに対し、ツラウはコソの用例の方がかなり多い。さらに、ウズラウはコソ・ゾと呼応せず、カと呼応するのが一般である。

以上を踏まえて、本稿では、次の3点について考察を進めて行きたい。

- 1 ラウの上接語がラ変「ある」に傾いているのは何を意味するか。
- 2 ツラウが多くコソの結びとして用いられるのは何を意味するか。
- 3 ウズラウがコソ・ゾと呼応せず、カと呼応するのは何を意味するか。

以下、ツラウ・ラウ・ウズラウの順序で考察を進める。各節

ごとに、用例に通し番号を付する。

## 二 ツラウの用法

ツラウは「つらむ」を出自とするが、「つらむ」自体が「つらむ」という連語ではなく、「つらむ」で1語の助動詞(複合辞)と考えるべきものである。かつて詳細に述べたことがある(注(2))ので、それを参照せられたいが、要点を簡略に述べると、まず、「き」が言語主体の置かれた現在と、もはや何のつながりも持たない遠い過去を表わすのに対し、「つ」は、言語主体の置かれた現在と密接に関連する直前の(近い)過去を表わす。そして、「けむ」が「き」によって表わされるような遠い過去のコトガラを推量するのに対し、「つらむ」は「つ」によって表わされる直前の(近い)過去のコトガラを推量する。すなわち、「らむ」は「現在推量(ているだろう)」の「現在」の意味を捨象し、単なる「推量」を表わす。したがって、「けむ」が1語の助動詞であると同様に「つらむ」は1語の助動詞である。それを次の歌で説明する。

思ひつつぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを (古今和歌集)

「見えつらむ」は「見えてしまつ（完了）ているのだから（現在推量）」などという意味ではなく、「たつた今の夢に見えたのだから」の意味である。下の句が示すように、なぜ目を覚ましてしまったのか、今からでも夢の中に戻りたいという悔しい思いを述べている。

ツラウはこの「つらむ」の用法を受け継いでいるが、室町期には過去推量「けむ」が衰退してしまつたので、ツラウが広義での過去推量を担当している（タラウは、体言に上接する用法が一般で、文末終止の用法は未だ稀である）。

ちなみに、ツも衰退し、次のような用例が稀に現れるのみである。「サキニ（＝先程）」という副詞が示すように、直前の過去の意味を残している。

1 サキニ波ノ字アンジナラセトアツ、ルミチく案シタニ中ノ字ニナラサウト思<sup>ッ</sup>ガイカント云タソ（二二口オ）

また、「つらむ」に現在のコトガラを推量する用例が稀に見られるのと同様に、ツラウにも現在のコトガラを推量する用例が稀に認められる。『玉塵抄』に次の1例が現れる。他の82例は全て過去推量の用法に属する。

2 杜子美ガ天末ノ李白ヲ思テ作タ句ナリ；クル、雲ノカラ打ナカメテ江東ノアンノアタリニソイツラウト思テミヤツタ

### ソ（一6オ）

さて、前節で見たように、「コソツツラウ」の用例が多い（83例中55例）ので、その用法を中心に見て行きたい。

「コソツツラウ」の用法で、特筆すべきは「已然形+バコソツツラウ」の用例が認められる（6例）ことである。先に「思ひつつぬればや人の見えつらむ」の用例を掲げたが、この歌の「つらむ」の用法は、「人の見え」たかどうかを推量しているのではなく、なぜ夢に現れたのか、それは「思ひつつぬればや」ではなかったか、という原因・理由を推測するものである。「らむ」には、上接するコトガラ自体の推量と、そのコトガラの原因・理由を推量する用法との二つがあることは周知の事柄であるが、それは「つらむ」にもそのまま当てはまる。室町期には係助詞「や」が衰退しており、ツラウに関して言えば、「已然形+バコソツツラウ」がその表現形式に属する。

3 鶏頭ハトツサカナリ此ヲアツメテシタカ又雞ノ毛ヲアツメテシタカイツレニ鶏頭ノ字ノ心アラウソ奇異ナ物ナレハコソ献シツラウ（二七49ウ）

4 乃<sup>オノ</sup>東：冬至ノ後ニデクルソ五月ノ夏ハカル、ソ本草ニアルトシタソ医者ニタツネヌソ薬ニナル草ナレバコソ本草ニソツラウソ（一2ウ）

用例 4 について言えば、「乃東」がどういう草であるか不明であるが、本草書に載っているのは薬になる草だからであろうの意である。このように「已然形+バコソ〜ツラウ」は既定のコトガラの原因・理由を推量するものである。「ゾ〜ツラウ」にはこの用法は見られない。ゾ自体が衰退していると見るよりは、コソに比して係助詞としての陳述性が弱く、したがって、「已然形+バ」という条件句に下接しえないためと考えられる。

ツラウだけでなくラウにもこの用法はあり得る。実際に次の 2 例が認められる。同様に「已然形+バコソ」が用いられている。

5 橋柱ノ下ノ横木ノ入<sub>ル</sub>レ沙<sub>ニ</sub>者<sub>ヲ</sub>曰<sub>フ</sub>三(蹲鴟)ト一ハウハシラシタノ  
木ノヨコナ木ノ沙ノ中エスリ入<sub>タ</sub>ラ(蹲鴟)ト云ソ鴟ニ  
タレバコソ云ラウ(九10ウ)

6 殷ノ湯王ノ時七年大旱シタソ桑林ノ神ニ爪ナドキツテ吾ツ  
ミアレハコソカウアルラウメテナゲカレタツレソ  
(二七9オ)

右は、既定のコトガラに対し、その原因・理由を推量するものであるが、それとは逆に、既定のコトガラを根拠として、一定の推量を述べる用法が認められる。具体的には確定順接の接続助詞「ホドニ」を用いて根拠を示した上で、「コソ(ゾ)〜

ツラウ」を結びとする。

7 輻重<sub>ニ</sub>コサノモノ衣服サカ酒ナドヲノスルテガレイ車ト  
アリサレドモ名ニ重ト云ホトニヲモイ物ヲモツミゾシツラ  
ウソ(一一39オ)

8 人心性ハ水ノ湍ノ如クナソ<sub>ニ</sub>水ノハヤイ湍ニ此字ヲカイタ  
ホトニ性ノハヤイコト水ノハヤイ湍ニコソ比シツラウ  
(二二53ウ)

9 此弾枝ガ汗<sub>ヲ</sub>カケバ以タ主カヤムソ主カシヌレハ枝ガ折<sub>ラ</sub>レバ、  
枝トハセネドモ老人ニタマワルホトニ杖ニコソツイツラウ  
ソ(六9オ)

第7例について言えば、「輻重」は「テガレイ車」とあるけれども、「重」とあることを根拠に「ヲモイ物ヲモツミ」もしたのであろうと推量する。

接続助詞「ホドニ」を用いた用例は「ゾ〜ツラウ」1例「コソ〜ツラウ」2例ではあるが、ツラウは単なる過去推量ではなく、何らかの根拠に基づく、言語主体にとってほとんど確信的な推量を表わしている。その確信の強さを、コソが83例中55例も用いられていることが示していると考えられる。接続助詞「ホドニ」によって明示されていなくても、次の諸例が示すように、文脈上その推量の根拠を示唆する用例が多く認められる。

10 陸（放翁）カ書籍ヲラク室ノ名ヲ（書巢）ト云タソ書コソ  
多ウアツ、ラウソ（四四23ウ）

11 天カカケテ日月ナイホトニクライ所ヲ鍾山ノ龍カ火ヲ口ニ  
フクンテ西北ノ天門ヲテライタソ山神ノ龍ハ火龍テコソア  
ツ、ラウソ（五19オ）

12 吾<sup>カ</sup>家、壁ヲコト／＼ク紅ノ泥テヌツタソ泥ニアカイ薬カナ  
ンゾ合セテコソシツラウソ（一九43ウ）

13 酒サメテ此ヲミテ吾ト神變神ノワザヂヤ又カウスル此ノヤ  
ウニハテクマイト云タソマンジコソシツラウソレニヨツテ

世間ニ張旭カツブリト異名ニ云タソ（三七11オ）

14 祈祷ノ為ニセニヲコ、エソナエタト云タソトコニライタト  
コソ云ツラウヤカテソコヲホツタレハ一萬貫ヲ得タソ  
（二〇65ウ）

用例10は「書巢」という名称から「書コソ多ウアツ、ラウソ」と判断する。用例11は「火ヲ口ニフクンテ」から「火龍テコソアツ、ラウソ」と判断する。他の用例も前後にそのように推量する根拠が示されている。このようにして、「コソ（ゾ）」ツラウ（83例中73例）が示すように、ツラウは単なる過去推量ではなく、言語主体にとって確信的な推量を表わすと考えられる。元來疑問詞を承けることのないコソはもとより、疑問詞

と共に得るゾについても、「ゾ」ツラウ（18例）の場合、疑問詞を伴う用例は見られない。したがって、3例のみではあるが、ツラウが疑問の係助詞カと呼応する用例が見られることが問題として残る。それについて考察する。

15 留<sup>レ</sup>意ハ意ヲトメテ心ニ入レテイカホトノイトスチヲソエ  
テカ此ノ袍ヲヌイシタテツラウソ（三九50ウ）

16 ソノ山ノモトハ死人ヲウツム所ソ三昧原<sup>ヲ</sup>ソソレエ上テミ  
ヲロイテ悲ミナケイタソ昔カラ今マテイカホトカウツマレ  
ツラウソ死ヲカナシウタ心ソソコテ一ナケキシタソ  
（四八4オ）

17 杜一モ年ワカイ男チャホトニ得<sup>テ</sup>意<sup>ヲ</sup>面白思テ大酒ヲノウ  
テ夜遊シテ合歡セウ今夜一コヨイハ酔テドコノ楼上ニカネ  
ラレツラウト作タソ（四五48オ）

右の3例は「疑問詞＋カ」である点が共通する。したがって、表現形式としては疑問文であるが、意味内容を考えると感嘆文に近い。用例15・16はともに疑問詞「イカホド」が用いられているが、どれほどの死人・糸筋かという数量を問うているのではなく、どれほど沢山の死人が埋められ、どれほど多くの糸筋が用いられていることか、という詠嘆を表わしている。同様に用例17もどこの「楼上」かを詮索しているのではなく、どこか

の楼上で眠り込んでいることだろうという妻の嘆きを表わしている。ツラウが「疑問詞+カ」の結びとなる場合は、このように言語主体の「くことだろう」という詠嘆を表わすと考えられる。

### 三 ラウの用法 (二)

第一節で指摘したように、ラウの特徴は、上接語がラ変動詞「ある」の圧倒的に多い(143例中120例)ことであり、それが何を意味するかを考えて行きたい。まず、係助詞ごとに上接動詞の分布を示すと、次の通りである。

	ラ変「ある」	カ	コン	ゾ	Φ	
一般動詞	2	4	62	46	8	計
計	6	74	50	13	143	23

ラ変「ある」への偏りは係助詞全般に通じて認められる。次に、ラ変動詞「ある」を本動詞(単独用法)・補助動詞に分けて示すと、次の通りである。カについては用例数が少ないので1から5の全てには及んでいないが、一般的に係助詞の相違による

分布の偏りは認められない。すなわち、ラ変「ある」への偏りは、係助詞の相違に因るものでなく、ラウそのものが内包する特性である。

	1 本動詞	カ	コン	ゾ	Φ	
2 断定テ+アル	3	10	7	3	1	計
3 指示副詞(カウ・サウなど)+アル	1	7	1	1	3	34
4 形容詞・形容動詞類+アル		14	6	1	1	21
5 動詞連用形テ+アル		13	14	2	2	29
計	4	62	46	8	120	29

4 「形容詞・形容動詞類+アル」については、次のように「連用形コン(ゾ)アルラウ」が現れる。

1 榻妃ノヨソライラ云タソ雨ヲラビテヌレトシテウツク  
シウコソアルラウ(一八18オ)

2 南宋ノ武帝ノムスメ寿陽公主ナリウツクシウソアルラウソ  
レニヒタイエ梅カタマツテアツタソ錦上ニ花ヲシイタコト  
ソ(二一34オ)

3 此ヤウニカナシイコトニアウコトヨ吾ハヒトリカナシイメ

ニアウソ蘇武下ノハナントイラシムソカナシウコソアルラ  
ウメノ心ソ (五二41ウ)

4 葉ノ色ガ赤ウコソアルラウ光テテリくトアルソ亦アライ  
碧ナ雲ノヤウナ色モマシツテアルラウソ (一五77オ)

係助詞コソ・ゾを伴わない場合も、「形容詞連用形+アル」  
の用例は多く認められる。

5 倚々ハ竹ノウツクシウアルナリソ (二四22ウ)

6 亀ハ玄衣使者トモ云タソクロウアルソ水ニスムソ

(二六18オ)

7 渦ハエクボト云ソ美人ノ笑テホウニクホミノマルウアルヲ  
云ソ (二六28オ)

cf. 両方ノホウニウツクシウエクボノアツタコトソ (五〇52オ)

8 カウヘカイタミカアリサシツクヤウニイタウアツタソ

(五64ウ)

9 ラヒヤ冠ノケタカウアルヲ山ヤ雲ニタトエタソ (二五35ウ)

したがって、「連用形コソ(ゾ)アルラウ」は、この「形容  
詞連用形+アル」を、文末のラウと呼応させるために、コソ・  
ゾが挿入されたと考えることができ。

次に形容動詞については、現代語では「まだらである」のよ  
うに連用形は「―で」であるが、この時代は、次のように「―

に」が用いられる。<sup>(7)</sup>

10 木ノ色カ斑ニコソアルラウソ (三五36ウ)

11 王(愷)ハ此モタノシイ者ソ此ハ赤(石脂)テヌツタソ赤  
(石脂)ニマレニソアルラウソ (八39オ)

後者の「マレニソアル(ラウソ)」は、現代語の感覚で言えば、  
「稀にある」ではなく「稀である」の意である。次のように色  
彩全般も形容動詞「―ニ」と認識されている。

12 紫(皮鷓)ハ色カ紫ニコソアルラウ (九11オ)

13 禹錫<sup>ウツ</sup>三元(珪<sup>ツ</sup>)…元ハ玄ト同ソク口色ニコソアルラウソ

(一九54オ)

さらに、形容動詞と同じ活用をする助動詞「ヤウナ(如クナ)」  
も「ヤウニ(如クニ)アル」である。

14 巴山ノ月ハナニトカ満月ニ馬ヲ引フクラメタヤウニアルラ

ウソ (三五12オ)

15 宝山ノマエフモト路ガクルリくマガツテクラマノ七曲ノ

如ニコソアルラウ (一六23オ)

以上、「形容詞・形容動詞+アル」の用例を見てきた。これ  
らのアルを次のように考えたい。すなわち、たとえば「ワカイ  
葉ノアヲくトアル(三34オ)」「春ノ日ノノドくトアル  
(二二10ウ)」「人ノカヲノ色ナトウルくトアル(二五33ウ)」

「人ノナリモ心モノンピラトアル(四三49オ)」などのアルは上接の副詞によって示される状態にあることを表わし、したがって、アルは本動詞の性格を有する。すなわち、「アル」に対し、上接の副詞は装定(修飾)の関係にある。それと同様に、「形容詞・形容動詞+アル」のアルも、形容詞・形容動詞によって示される状態にあることを表わす。「指示副詞(カウ・サウなど)+アル」も同様に考えることができる。さらに、「断定デ+アル」も、デが断定「ヂヤ」の連用形であるならば、アルは述定の補助動詞ということになるが、疑問は残る。周知の如く、山田孝雄博士はデを格助詞として扱う。たとえば、次のようなものを断定「デ」と考えて良いかどうか。

16 山陽ト云所ノ守護ニナツタソ民百姓カナツイテ喜タソイツ

マテモコ、ノ守護テアレカシト思ウタソ (二五44オ)

17 淮南王テ劉安ノアツタソ (一八45オ)

18 太宗ノ秦王デイラシムタ時ニ唐ニ婦シテツカエタソ

(二六24オ)

このような品詞論はさておき、次のような「〜デ+アル」も、言語主体の置かれた現在から見て「そうである」ことを表わす。すなわち、ツラウが過去のコトガラに対する判断であるのに対し、「〜デ+アルラウ」は現在のコトガラとして捉えた判断で

ある。

19 王ガ位ガ宰相ニツ、イタ位テコソアルラウソ (一〇54ウ)

20 カラニキズアツテカタワ者デハアレドモ物シリデゾアルラ

ウ (七46オ)

21 劉震カムスメアリ名ヲ无双ト云タソ定テ第一ノ美人デソア

ルラウソ (五三37ウ)

#### 四 ラウの用法 (二)

次に5「動詞連用形テ+アルラウ」の説明に移る。「〜テソ+アルラウ」14例「〜テコソ+アルラウ」13例「テΦ+アルラウ」2例が認められる。

1 ブグウハ龍眼珠ト云フ龍ノ眼ニ似テソアルラウ(四七8ウ)

2 楚辞ニノツテソアルラウ (三五66ウ)

3 世説ニノセテコソアルラウソ (一三36ウ)

4 一斗ハカリ酒ヲ以テハカエマイテ祭テ吾モノウテコソアル

ラウ (四五47オ)

5 瓢ヤ剣ヲ壁門ニカケテ意ヲ楽テ酒ヲノンテアルラウ

(四三15ウ)

現代語で言えば「〜ている・〜である」に当たる表現を「〜テ

「アル」で表現する。用例1の「似テソアル（ラウ）」は現代語の「似ている」に相当する。

この「ソテアル」自体の用法は数種に亘るが、ここでは「ソテアルラウ」についてのみ述べる。次の用例が手掛かりになる。

- 6 四番メノ丹ノ名ヲ朱（丹）雲（丹）ト云タカ薬ノ色ガ赤ウ  
 コソアルラウソ光テテリ／＼トアルソ又アライ碧ナ雲ノヤ  
 ウナ色モマシツテアルラウソ丹薬ノアツウアルヲ腰ト云タ  
 カ（一五七オ）

傍線で示したように、前節で指摘した「形容詞＋アル」「副詞＋アル」の用いられた文脈で「マシツテアル」が用いられている。したがって、「アル」が上接の副詞・形容詞・形容動詞によって示される状態にあることを表わすのと同様に、「マシツテアル」は、動詞の表わす動作性をテによって状態性に変換した上で、「アル」が現在そのようにあることを表現していると考えられる。それ故、「マシツテアルラウソ」は「混じっているのだらう」の意となる。このように「動詞連用形テ＋アル」が状態性を表わす用例を数例掲げる。

- 7 高イ岩ノアヲ／＼トシテイソゾト立テアルハ剣ライクツモ  
 ヌイテソロエテタテ、ライタ如ナソ（二四三オ）  
 8 中ノ皮ノウスハタハウエノコウニヒツツ／＼イテアルソ

（二六四ウ／15オ）

- 9 某ハ清江ノ水神ノ使者ナリ漁人ノツリウドニトラエラレテ  
 アルト云ソ（九五オ）

- 10 作<sup>コク</sup>（レ色<sup>ツ</sup>）ト云ハ平生ハナニトモナウアルソキニアワヌコ  
 トヲ云時ニ色ヲチカエテアルコトソ（二二六ウ）

第10例で「ナニトモナウアル」と「色ヲチカエテアル」とが対応していることに注目したい。

タ（ル）とテアルとの相違も微妙なものがあるが、やはり何らかの区別は認められる。

- 11 貧ニシテカナ（シ）ウシテイウヨリ州ノ守護ノ所エキテア  
 ラハヨイコトアラウト云タソ（二五四オ）

- 12 人ノクル足ヲトキイテ喜タソクル者ノ足ヲトキ、シツ  
 テ喜タカ客人ヲ喜テアルカ（五五ウ）

用例11は、「来タラバ」が来るといふ行為そのものの実現を仮定しているのに対し、「キテアラハ」は来て仕えているならばという状態性の意を含む。12は、「喜タカ」がその時の知人の来訪の喜びを表わしているのに対し、「喜テアルカ」は、平生客人の訪問を歓迎しているという意味合いを表わしていると考えられる。

以上のように、「アル＋ラウ」120例の「アル」は、現に

そうである(断定デ+アル)、もしくは、そのような状態にある(副詞・形容詞・形容動詞類+アル動詞連用形テ+アル)ことを表わし、下接する「ラウ」は、そのことを推量するものと考えられる。したがって、前代の「らむ」と異なり、ラウ自体が「現在」推量を表わすのではなく、上接するアル終止形が現在(そうである・そのような状態にあること)を表わし、ラウはそのことを推量していると考えられる。それは次のようにウ・ウズが下接する場合と比較すると明瞭になる。

13 相人カ云コトハ此女人ハ富貴ニアラウト云タソ(二三61ウ)

14 吾ヲモトメラレハ南山ノ南カ北山ノ北ニカ山居シテアラウ

ス人間エヅルコトハアルマイト云タソ(六58オ)

用例13「富貴ニアラウ」は現在富貴であろうと推量しているのではなく、将来富貴になるだろうと相人が占っているのである。14「山居シテアラウス」は、もし今後私を探し求めるようなことがあったら、人間社会を離れ、どこかに山住まいしているであろう(未来完了)ことを述べている。このように、ウ・ウズは未来の事態を推量する点がラウと異なる。

最後に、一般動詞23例(カ2例・コソ12例・ゾ4例・Φ5例)についてまとめる。ゾ4例は全て「動詞連用形+ゾスル」のような表現形式で、「アリゾスル」2例「ヒカリゾスル」「早(?)

ゾスル」各1例である。

15 洞真記トアリツネニ此ノヤウナコトヲシルイタ書ヲ洞記ト

云ソ：サレドモ洞真モアリソスルラウメ(二〇12オ)

類例(二九57オ)

16 外国トハ四方ノ海ノ中ニアルエビスノスム国ソソコカラ夜

明ト云苔ヲマラセタソ夜ヒカリソスルラウ(二二23ウ)

17 玉ノアブラ地カラ水ノ如ニ早ソスルラウ玉ノ酒ト云タソ此

ヲノメハ長生ヲサスルソ(四五35オ)

用例15は存在詞アルの文法的ふるまいは動詞であるから、それを承ける形式動詞はスルである。用例16は「夜明ト云苔」だから「夜光るのだろう」と推量している。すなわち、超時的な推量である。用例17「早(?)ソスルラウ」は叡山文庫本も同文であり(四五57オ)疑問例として残る。

コソ12例のうち6例は「云ラウ(≡言うのだろう)」「読ム(読メル)ラウ(≡読むのだろう)」という、その漢字漢語の言い方・読み方を推量したものである(用例18「読メルラウ」)。

18 月舟史記ヲ建仁ニテ講アリ：渾ノ字ハ皮ノ字ヲ付タホトニ

濁テハヨムマイコトトイエタソ景徐ノ濁テ御ヨミアツタワ

ルイトハイエナンタソ：ドチエモコソヨメルラウソ

(五五56ウ)

他の6例は次の通りである。

19 モシ人ノクル、魚ラクウテ相ラツイシテアラハタレヤノ人

カ魚ラクワイテコソイルラウト云テクル、者アルマイソ

(二三13オ)

20 ウシロノ方ヲ恵文冠ヲナシテツクリコソスルラウ

(三四24オ)

21 月(題) カネナドデウスウシテアツルカ馬カアユマバカラ

くトコソヒックラウソ (一八36ウ)

類例 (二七35オ・一四38オ)

22 マタ明州ヲエサライテコソイツラウソ；石(尤)ノ風ニツ

イシテハツカシウコソ思ウラウメハヤウ守護ヲツイセテ緑

ラムサフルコトヲ風ニタイシテハチタソ (三二28ウ)

用例19・20はこれまで見てきたのと同趣である。用例21「馬

カアユマバカラくトコソヒックラウソ」は恒常仮定の用法に

属する。用例22は前後が「イツラウソ」「ハチタソ」と過去表

現なので、「ハツカシウコソ思ウラウメ」も「思ウツラウメ」

であるべきである。このまゝを認めるならば、「ラウ」が過去

推量を表わし、『玉塵抄』では孤例となる。

最後に、一般動詞の場合のカ2例、Φ5例に分析に移る。

まずカ2例は次の通りである。

23 ススシイ風ノ吹テ月ノ面白イ夜ニ玉人―美人トコデカ簫ヲ

吹ル、ラウ思イヤリテアチキナイソ (四三43オ)

24 吾ハドコデモマヲトコヲシテ又ヲツトヲ人ノ女房ヲカスル

ラウト云テシツトスルソ (一八20ウ)

用例23は、第二節の用例17「ドコノ楼上ニカネラレツラウ」

と同様に、どこかで美人が簫を吹いているのだからの意である。

ラウは「見」「現在推量」のようであるが、これまでに見てきた

ラウの用例から類推すれば、「吹いている」の存続の意味は「吹

ル」が担っているのである。24は浮気癖のある女が、夫も

また「人ノ女房」と浮気をしているのだからかと嫉妬するとい

う意味である。文脈上「スル(ラウ)」は「現にしている」の

意味となる。

Φ5例は次の通りである。

25 此ノアタラシイ家ノイカタリノ者ノスギ去ヲ見ツクスラウ

ソ (四八23ウ)

26 万花紅紫ノ花ノイカホドノツホミツ、ンテアルヲ破テサク

ラウソ (四四44オ)

27 アトカラナニタル人カクルラウト思テアトヲミタソ

(三四4ウ) 類例 (一三54オ)

28 踏ミミツ、ケタソ足テフムヒヤウシモツ、ケテ三ツフム

ラウソ (四八九オ)

用例25・26は先に掲げた「昔カラ今マテイカホトカウツマレツラウソ」と同趣である。すなわち「イクタリノ者」「イカホドノツホミ」は數量を問うているのではなく、「どれほど沢山のことだろう」という感嘆文に属する。用例27は疑問文であるが、「アトヲミタソ」から知られるように、「ナニタル人カクルラウ」は「付いてきているのだろう」という現在の事態の推量を表わしている。用例28は超時(恒常)的な推量を表わす。

以上ラウの用法を見てきた。前代の「らむ」と異なる点は、「現在推量」の「現在(「存続」)の意味は上接する動詞が担っていて、ラウは推量のみを表わすことである。ラウの上接語がラ変「ある」に傾いているのは、その表徴であると理解される。ただし、ラウは、係助詞ゾ・コソと呼応することが多いことから知られるように、言語主体にとって確かな推量を表わす。

## 五 ウズラウの用法

第一節で示したように、ウズラウは係助詞ゾ・コソと呼応せず、カと呼応する(24例の8例)点がラウ・ツラウと異なる。すなわち、推量というよりは疑問の意を表わす。また、ロドリ

ゲスが指摘しているように<sup>⑩</sup>、ツラウが過去、ラウが現在という既に状態のコトガラを推量するのに対し、ウズラウは一般に未来、すなわち、未然態のコトガラを推量する。この二点がラウ・ツラウと異なる。以下、具体的に見て行きたい。

まず、カと呼応する24例は、「疑問詞+カウズラウ」11例、「体言+カウズラウ」4例、「動詞+カ+セ(アラ)ウズラウ」9例(「アラウズラウ」は1例「カヤサイデカアラウスラウ」)である。次に該当する用例を2例ずつ掲げる。

〔疑問詞+カウズラウ〕

1 牛ヲカウテ牛ニノツテ角ヲタ、イテ堯舜ノ世ニハアワヌソ  
イツカクラヤミノ夜カアケテ明日ノ照ヤウナ堯舜ノ世ニ  
アワウスラウトウタウタソ (四八11ウ)

2 吾子トモノコトハ云ニ不レ及一門一族モアブナイコトソニ  
クマレハナニタルコトニカアワウスラウ (六52ウ)

〔体言+カウズラウ〕

3 鼻ヲカソキヲトサレウズラウト思テラソル、気色モスコシ  
モナイソ (四八18オ)

4 民ガ文王ニナツクホドニ王ニカナラレウズラウト思テトラ  
エテメシウトニシテライタソ (一一18オ)

〔動詞+カ+セ(アラ)ウズラウ〕

5 賢人君子ヲ朝廷アゲ用イラレカセウスラウト思テ賢人ノ材  
ヲ内々求テライタ心ソ (三九4オ)

6 吾カマゲタワメテ質ヲカヤサイデカアラウスラウトソコヲ  
ヲソレテ質ヲヲコセヌソ (二〇28オ)

次に係助詞を伴わないウズラウ8例は、疑問詞を伴うもの6  
例、伴わないもの2例である。ともに2例ずつを引用する。

7 カシラノニクチナワヲ見ル者必死デハカナワヌト云イ伝タ  
ヲ聞タソノマ、ライタラハイクタリカ見テ死セウスラウソ  
(五一39オ)

8 イツ比ヨソエ行タ人カエラレウスラウト問タコトソ  
(三五22オ)

9 田ヲツクルコトヲヤメテ兎ノキテ株ニフレテ死ルカアラウ  
スラウト思テクイヲチャト守テイタソ (一五58オ)

10 住持ノ所ニ客来カアルソ用カヨ<sup>テ</sup>ラウスラウトウ帰ラレタラ  
ハヨカラウソ (五83ウ)

このように、ウズラウの32例のうち30例までが疑問詞・疑問  
の係助詞と呼応する。したがって、ウズラウは推量表現よりは  
疑問表現に属すると考えるのが妥当である。これがウズラウの  
係助詞ゾ・コンと呼応せず、カと呼応する理由となる。<sup>(1)</sup>

次に、ウズラウに上接する動詞について見て行く、まず一般

動詞27例は全て未然態(用例1~5・7・8)である。ラ変「あ  
る」5例は、未然態2例(用例6・9)、已然態3例(用例10)

である。已然態の他の2例は次の通り。

11 カサウハヤスイソソツト五日ノ間ニ秘閣ノナン万カアラウ  
スラウソレヲミワタシナラウコトハナルマイト云タソ  
(二一39オ)

12 死タ者ノ官ハ戸曹ニハカキルマイソナンノ官テカアラウス  
ラウソ (四七38ウ)

ラ変「ある」は状態動詞(存在詞)であるから、ラウのところ  
で見たように、通常は已然態に属するが、ウズラウの場合は未  
然態をも表わす点は、前節で挙げた「富貴ニアラウ」「山居シ  
テアラウス」のウ・ウズが未然態を表わすことと同趣である。

以上、『玉塵抄』の用例に基づき、ツラウ・ラウ・ウズラウ  
の用法を見てきた。要点をまとめると次のようになる。

一 ツラウは過去推量を表わす。しかし、前代の「けむ」と  
は異なり、言語主体にとって確信的と言い得る推量を表  
わす。ツラウが多くコソの結びとして用いられるのはそ  
れを意味する。係助詞カと呼応する場合は、疑問ではな  
く、詠嘆の意味を表わす。

二 ラウは現在推量（既然態）を表わす文脈で用いられる。

しかし、前代の「らむ」と異なるのは、ラウ自体が「現在」を含意するのではなく、上接の動詞が現在の状態を表わしており、ラウは推量のみを表わす。上接語がラ変「ある」に傾いているのはそれを意味する。コソ・ゾと多く呼応することから、確かな推量を表わすと言える。

三 ウズラウは、既然態の推量ツラウ・ラウの異なり、未然態の推量を表わす。しかも、推量表現というよりは疑問表現を表わす。コソ・ゾと呼応せず、疑問詞・疑問の係助詞カと呼応するのはそれを意味する。

〔注〕

(1) 『玉塵抄』からの引用は「国立国会図書館本」（勉誠社複製）に拠る。

(2) 『叡山文庫本』（清文堂出版複製）も参照した。

(3) ラウ・ツラウ・ウズラウに関しては、次の拙稿を發表している。

複合助動詞「つらむ」の用法に関する一考察 『学苑』一九九三年一月

複合助動詞「つらう」の用法 『学苑』一九九五年一月

助動詞「らう」「うずらう」の用法 『学苑』二〇〇一年一月

ツラウ・ウズラウについて基本的な考え方に変更はないが、ラウに関しては上接語の扱い方に変更がある。本稿はその点を詳述した。

(3) 「複合辞」の定義は、永野賢氏「表現文法の問題——複合辞の認定について——」（『伝達論にもとづく日本語文法の研究』一九七〇年 東京堂出版 所収）に基づく。「連語」と同趣に理解している向きもあ

るが、それとは異なる。

(4) 拙稿「平家物語における助動詞「つ」の文章論的考察——助動詞「き」との比較を通して——」（拙著『玉塵抄の語法』二〇〇一年 清文堂出版 所収）を参照せられたい。

(5) 小田勝氏「实例詳解古典文法総覧」二〇一五年 和泉書院）は、「ただ今、いかで、居給ひつらむ御簾引き上げても入りなまほしく（『夜の寢覚』）」を引用し、「現在の事態を表しているようである」とされる（203頁）。

(6) 大野晋氏「係り結びの研究」（一九九三年 岩波書店）22頁。

(7) 詳しくは拙著『玉塵抄の語法』第一章第四節「玉塵抄の述定・装定表現——「デアル」と「ニアル」——」を参照せられたい。

(8) 次のような「テアル・ラル・イ（キ）ル」の相違も問題となる。

チイサイ用ニタ、ヌ木ハ山ノ上ニタカアカリシテアルソ正シウモナイ  
邪佞ナ者ハ高位ニタカアガリシテラルソ蓮花ノイサキヨイ花ノ君子  
トイワレタヨイ花ハサワベノアタリニカマツテイタソ（一七65ウ）  
「アル・ラル・イ（キ）ル」の通時的研究は、金水敏氏『日本語存在表現の歴史』（二〇〇六年 ひつじ書房）が詳しい。

(9) 「読めたる（云元）」と考えたが、類似の文脈に「読むる」「読まるる」も現われる。拙著『玉塵抄の語法』第一章第一節「玉塵抄の中性動詞——「読ムル」の用法——」を参照せられたい。

(10) 土井忠生氏訳「ロドリゲス日本文典」（一九五五年 三省堂）84頁。

(11) 阪倉篤義氏「日本語表現の流れ」（一九九三年 岩波書店）は、ウズラウと呼応する力について「無くての意味は変らなないといった、間投助詞的なものになっていた」（194頁）と説明するが、本稿の用例からも知られるように、一概にそうとは言い切れない。